

No. 70 - 2025

地方史 みやざき

題字：安田尚義

発行所 宮崎市船塚 3-210-1
(宮崎県立図書館内)

宮崎県地方史

研究連絡協議会

Tel 0985-29-2954

発行者 会長 甲斐 典明

印刷所 ㈱ヒダカ印刷

Tel 0985-28-4113

令和7年7月16日発行

宮崎県地方史研究の充実を目指して

宮崎県地方史研究連絡協議会

会長 甲斐 典明

令和六年度の宮崎県地方史研究連絡協議会は、委員会の充実した活動を受け、五月二十四日(金)第一回理事会、七月二十三日(火)第二回理事会・総会・研修会、十一月十三日(水)秋季研究大会を開催いたしました。

総会では、令和五年度事業・決算報告、令和六年度事業計画・予算案のほか今後の秋季研究発表大会等について審議・協議いたしました。

研修会では、宮崎県総合博物館の宮地輝和氏に「伊東四十八城の実相」と題してご講演いただきました。宮崎県の中世史を考える上で見逃すことのできない伊東氏について、支配領域として広く知られる「伊東四十八城」の実証的な検討から見えてきた、後世に加筆変更された『日向記』と伊東氏の支配の実態について貴重なご教示をいただきました。

十一月十三日(水)には、開催が危ぶまれた秋季研究大会日南大会を、日南市教育委員会のご協力のもと無事開催することができました。午前中は、各団体毎に飢肥城、飢肥城歴史資料館、小村寿太郎生家跡などを史跡巡検。「かつお炙り重」や「おび天」などの飢肥グルメを事務局から紹介いただいたお食事処で堪能し、午後からの会場となる小村寿太郎記念館に集合しました。開会式に続き、日南市教育委員会の長友禎治氏に「小村寿太郎と宮崎県」と題して、国の将来を思い一步先を見据え続けた小さな巨人、小村寿太郎につ

いてご講演いただきました。

その後、日南市教育委員会の佐藤智文氏による企画展解説を受けて、外務省外交史料館との共催「小村寿太郎とポーツマス条約」展を観覧。恐らく二度と見る事はないであろう、ロシア全権セルゲイ・ウイッテと日本全権小村寿太郎の直筆サインが記された、普段は外務省外交史料館所蔵の日露戦争講和条約「ポーツマス条約」調印書とロシア側批准書の原本を見ることができ、感じ入るところ大なるものがありました。コンパクトではありましたが、それだけにたいへん充実した日南大会となり、連絡調整に当りご苦労いただいた宮史連事務局ならびに暖かくご支援ご協力いただいた日南市教育委員会の皆様には、改めて心より篤く御礼申し上げます。

さて、世界に目を転じると、ロシアの侵略によるウクライナ戦争は三年を経てなお終結の気配を全く見せず、イスラエルのガザ侵攻もますます混乱を深めるばかりという予測のつかない状況です。

このような、つい数年前には予想もなかった現状を見るにつけ、「歴史は繰り返さないが、韻を踏む」という磯田道史氏の言の意味するところを、歴史を学ぶ者として深く考えております。

実はこの四月二十日、延岡の今山八幡宮で開催された「第一四七回西南の役延岡隊戦没者招魂祭」に主催奉賛会の副会長として出席しました。前年に鹿児島県に併合されていた宮崎県もこの戦争には多大な被害を被りました

が、西郷軍に参戦した延岡隊は旧藩士五十五名など計一三九六名余。戦没者八十名のうち最大の犠牲を出したのが明治十年四月二十日の現熊本市東区健軍での「熊本城東会戦」でした。第二次大戦中も今山八幡宮宮司がお一人で齎行されるなど、翌明治十一年(一八七八)四月二十日から今年までの一四七年間、毎年欠かさずに続けられている、おそらくは全国唯一の西南戦争慰霊祭でしょう。

延岡隊は八月十四日に投降、武装解除して延岡の市街戦は回避されましたが、翌十五日の和田越えの激戦に敗れた西郷は延岡市北川町俵野に本営を移設。十六日の最後の軍議後に初代陸軍大將軍服を焼却して軍を解散、名実ともに反乱西郷軍となり、十七日夜からの鹿児島に向けたあの九州山中行が始まったのがこの延岡でした。延岡は田原坂の戦いに象徴される熊本の戦い、西郷終焉の地鹿児島島の戦いと並ぶ、西南戦争「三大局面転換地」の一つです。閉会の挨拶で、西郷史観で語られる事の多いこの日本最期の内戦を明治政府の視点からも見る事の必要性を小倉第十四聯隊長心得乃木希典少佐の日記を紹介してお話しました。嘗ての西郷どんブームのような空気に流されない歴史観の大切さを改めて痛感したところです。

歴史は「鑑」。韻を踏む「各地域の鑑」を磨く宮史連各団体個々の活動の充実こそが宮史連全体の充実発展であることを確信し、宮史連の更なる発展を祈念いたしました。ご挨拶といたします。

研修会に関連して

「歴史研究を活字論文にして

発表する意義」

宮崎県総合博物館

学芸員 宮地 輝和

1 はじめに

令和六年度宮崎県地方史研究連絡協議会研修会にて話をする機会をいただいた。演題は「伊東四十八城の実相」である。これは同年三月に発表した「戦国期日向伊東氏の支配領域——日向記」ト翁本所収「分国中城主揃事（通称伊東四十八城）」の基礎的考察」（『宮崎県総合博物館研究紀要』第四四輯、二〇二四年、以下「紀要論文」という。）をもとに口頭発表したものである。本稿では、なぜ「伊東四十八城」に関する研究を行ったのか、そしてその研究成果や意義について記したいと思う。

2 研究のきっかけ

「伊東四十八城」は、戦国期に日向伊東氏が支配した城として知られ、支配領域や支配体制を語る上で用いられてきた。一方、筆者は中世日向伊東氏に関する研究を進めてきたが、一般書を執筆する機会において「伊東四十八城」に触れてこなかった。それは何故かといえ、同時代史料を博搜するなかで、「伊東四十八城」は戦国期の実態に即していないのではないかとこの違和感を抱いていたからだ。同時に筆者はこの違和感を論証する難しさも痛感していた。伊東氏研究自体が他の地域権力と比較して進展しておらず、その背景には伊東氏関連文書の残存数が少ないという状況があった。

歴史学では同時代史料を中心とする

良質な史料を用いて、歴史の事実や歴史的様相が明らかにされる。言い換えれば、良質な史料が無ければ研究は進展しないのである。研究が無ければ、その歴史があったかどうか不明と言わざるを得ない。その不明の部分に個人が想像で楽しむのは自由であるが、事実認定し、事実として他者に説明するのであれば客観性が担保されなければならぬ。特に、歴史はタイムマシーンで過去に遡って事実確認することができないからこそ研究手法の可視化やその客観性が重要になる。よって、筆者は「伊東四十八城」に違和感を抱きつつも、その論証は難しいと考え、あえて触れてこなかった。

しかしながら、現在進行形で「伊東四十八城」が事実として浸透していくさまを目の当たりにしてきた。そして、SNSを含むインターネット、一般書、歴史展覧会等で「伊東四十八城」に接するたびに自らが感じた違和感と向き合う必要性を感じたのである。こうして筆者の「伊東四十八城」研究は始まった。

3 「伊東四十八城」とは何か？

筆者による「伊東四十八城」の研究手法や成果について、紀要論文に基づいて改めて確認していきたい。「伊東四十八城」の出典は『日向記』ト翁本所収の「分国中城主揃事」という記事である。この記事には、伊東領国内とされる城等の名称とその主の名が列記されている。そして、記事末に「惣シテ分国中四十八ヶ所ノ城主ナリ」との記載があることから、「伊東四十八城」として広く知られているのである。しかしながら、この記事には四十九の城等の

名称とその主の名が列記されている。このような不審さはさることながら、問題はこの記事や『日向記』ト翁本の史料的性格が明らかになっていないことである。特に『日向記』の叙述の不審さは先行研究（拙稿「中世日向伊東氏関係文書の基礎的研究」『九州史学』第一六四号、二〇一二年）でも指摘されている。そこで『日向記』の異本等を広く集め、「分国中城主揃事」の比較分析を行った。

「分国中城主揃事」同様の史料について、『日向記』系統は、ト翁本を含めて五点存在し、その他に『平川為泉覚書』系統二点、「記録所書付写」一点を確認できた。『日向記』系統及び『平川為泉覚書』系統は、いずれも末文に「四十八（もしくは四十八人）」の記載があるものの、各本によって記載の城等の数は異なっていた。そして、各本を校合した結果、後世における重層的な編纂を経たために、いずれの本が一番原本に近いかが確定させるのは難しいと結論づけた。

次にト翁本「分国中城主揃事」の内容容検討を試みた。他史料と比較した結果、この記事は永禄十一（一五六八）年六月から永禄十二年七月の間の支配領域を示そうとしたものであることが推察された。そして、各武将の付記にある「今」の表現の検討により、原本は、元龜三（一五七二）年五月より前に成立したことが明らかになった。ただし、後世における加筆・変更の跡があることには注意が必要である。これは、写しの作成者が誤って転記したことや他史料を参照しながら、独自に変更を加えたためであると考えられる。よって、

現在、伝来するト翁本「分国中城主揃事」は同時代史料とは認められないだろう。正確に記せば、戦国期の記載部分を残していると思われるが、後世の加筆・変更箇所との区別が困難な状況になっているのである。

以上の検討から「分国中城主揃事」の記事のみでその内容の是非を問うのは難しい。紀要論文では、他の手法として軍勢派遣状況、比較的良質な編纂史料を根拠とした合戦史、棟札などを用いて、「伊東四十八城」に含まれる高知尾（高千穂町）などの地域は伊東氏の勢力範囲内とは認められないことを指摘した。そうであるならば「伊東四十八城」は後世に成立したものとみるのがよいであろう。

4 おわりに

紀要論文では改めて『日向記』を無批判に用いることの危うさを指摘した。重要なことは活字論文にして発表したことにある。自らが抱いていた違和感を整理した上で、結論に至る研究方法を可視化し、一般に広く公開したのである。これは、ただ周知効果を有するだけではなく、研究の進展を促すものである。今後は筆者の紀要論文が批判の対象となる。根拠をもとに学術的に批判されれば、筆者も応答していく必要がある。このような議論を経て、歴史研究は進展し、よりクリアな歴史像を見いだすことができるだろう。そうすれば、「伊東四十八城」は実像なのか虚像なのか見えてくるに違いない。まずは紀要論文を御確認いただければ幸いである。（インターネット上（J-STAGE）で公開中。）



令和六年度の活動

○令和六年五月二十四日（金）

【理事会】（県立図書館研修室）

新型コロナウイルスの感染による影響もない中で、例年とほぼ同時期に、役員改選もない年度でしたので、昨年と同じメンバーで第一回理事会を開催しました。会長あいさつの後、令和五年度事業報告・決算報告、会計監査報告、続いて令和六年度事業計画・予算案についての協議が行われました。

続いて、秋季大会を担当する予定だった県南地区の日南郷土史会からは、人員不足のため、開催が困難な旨の説明があり、同大会をどうするか審議となりました。もう一度、同会の会員と諮ってほしいということになり、同会の結果報告を待つこととなりました。その後は、情報交換等が行われました。

○令和六年七月二十三日（水）

【地区別協議会・理事会・総会】

（県立図書館研修室・研修ホール）

最初に、地区別協議会・理事会が行われました。理事会では、秋季研究発表大会日南大会について協議され、事務局が主体となって大会を運営することとで了解され総会に諮ることになりました。

総会では、会長あいさつ、県立図書館長あいさつ、各史談会や事務局員の紹介があり、議長を選出し、令和五年度事業報告及び決算報告、令和五年度

会計監査報告、令和六年度事業計画及び予算案が承認されました。

改めて本年の秋季研究発表大会は事務局が主体となって開催することを説明しました。また、来年度、再来年度はそれぞれ県北と県西で通常通りの開催が可能なので、その間に今後の大会の開催について協議することとなりました。

なお、各地区の団体が日頃行っている活動等についての情報交換は、時間が限られていることもあり、別紙を見てもらうことで割愛となりました。

【研修会】（視聴覚室）

総会終了後に、宮崎県総合博物館の学芸員・宮地輝和氏による「伊東四十八城の実相」というテーマで講演が行われました。

【令和六年度役員】

※改選なしで前年度と同じ

会長…甲斐 典明（延岡史談会）
副会長…石川 正樹（高鍋史友会）
…加藤 建夫（小林史談会）
…神保 侃弘（日南郷土史会）
監事…原口 勝（佐土原郷土史会）
…堀口 勉（串間史談会）
地区理事…柏田 公和（日向市史談会）
…椎 敏夫（木城史友会） 故人
…稲泉 元司（えびの市史談会）
…田代 義博（南九州文化研究会）
…佐藤 正信（個人会員）
…有馬 晋作（個人会員）
〔役員任期は令和七年七月総会まで〕

秋季研究発表大会（県南地区） 日南大会

四年ぶりの秋季研究発表大会となった県央地区の木城大会に続き、昨年は県南地区の日南大会として飢肥地区を中心に開催されました。

ただ同大会を主宰する予定だった日南史談会が人員不足のため、大会の運営が厳しいとして運営を断念したため、今回は宮史連事務局のメンバー（県立図書館職員）が運営を勤めることとなりました。そのため、午前中の史跡巡検は各史談会や個人で飢肥地区にある史跡等を巡ってもらい、午後からの研究発表を中心に同大会を開催しました。研究発表は、日南市役所生涯学習課文化財係の文化財専門担当官・長友禎治氏をお迎えし、「小村寿太郎と宮崎県」と題して、これまでの研究成果をもとにお話をいただきました。また、終了後には同市教育委員会の佐藤智文学芸員より、小村記念館で展示中だった外交史料館所蔵の貴重な資料（日露講和条約批准書（ロシア側）など）について実物資料を見ながらの解説も行われました。

今号では、長友氏の話をもとに深掘りした、モースやローエル、そしてラフタリオ・ハーン（小泉八雲）などの親日外国人と小村寿太郎の交流について同氏に改めてまとめてもらったものを以下に掲載します。



秋季大会研究発表

小村寿太郎と親日家外国人 との関係

日南市役所生涯学習課文化財係
文化財専門担当官 長友 禎治

今回は小村寿太郎と親日家外国人との関係について紹介させていただきます。初めに小村寿太郎の生い立ちから簡単に説明します。生まれは安政二年（一八五五）。明治四十四年（一九一一）、五十六歳で亡くなりました。生誕地は、現在の宮崎県日南市飢肥。父は飢肥藩士小村寛。小村家は下級藩士でしたが、代々商人町を管理する役職や藩外からの使者等に対応する大切な役目を担っていました。さらに父の代には藩の物産方にも属し財政通として活躍していました。寿太郎も幼少期から藩校、振徳堂で武士としての教育を受け、成績優秀で早くから将来を嘱望された少年でした。

明治政府での小村の印象としては、藩閥外の出身ながらも卓越した外交能力が認められ、外務大臣として日英同盟締結、ポーツマス講和条約締結、関税自主権の回復などをなした人物として記憶されている方も多いことでしょう。小村が外交を担った頃は帝国主義の時代、欧米諸国を相手に陸奥宗光とならんで日本外交の礎を築いた外交官として、今日まで高く評価されています。

青年期の小村は同郷の師、小倉処平に導かれて東京へ、さらにはアメリカで近代教育を受ける機会に恵まれました。

た。その時に出会った外国人から受けた刺激は、大きなものがあつたと想像されます。特に長く交流があつたのは、何れも大学南校（東京大学の前進）の教師であつたハウス（1836～1901。小村より十九歳年長）とグリフィス（1843～1928。小村より十二歳年長）の二人。次いで米国留学中に知り合ったベル（1947～1992。小村より八歳年長、電話の発明者）でした。三人と小村の交流については紙面の都合で省略いたしますが、『小村寿太郎 若き日の肖像』に紹介していますので、機会がありましたらご覧ください。

今回は先の三人の他に、親日家として広く知られているモース、ローエル、小泉八雲（英語ではラフタリオ・ハーン。ギリシヤ語ではヘルン）と小村寿太郎との接点について取り上げます。

この三人と小村との関係はあまり知られていませんが、エピソードを紹介することで、小村がいかに日本の文化・伝統を重んじていたか、その一面が浮き彫りに出来ればと考え一挙を挙げることにいたしました。とは言え、未だ深く研究した訳でなく、断片的な紹介や仮説になりますが、手元にある史料と先行研究者の研究報告をもとに、今後の小村研究の一助になればと考え、この場を借りて紹介させていただきます。

初めに米国の動物学者エドワード・シルベスター・モース（1838-1925。小村より十七歳年長）から紹介すると、モースはハーバードのローレンス科学学校を卒業、ハーバード大学やボールドウィン大学に勤務したのち、標本採取のため初来日しています。明治十年

（一八七七）に大森貝塚（東京都品川区）を発見し、日本考古学の基礎を築いたことでも知られる人物です。

木村早霧の「書簡から見るモースと日本人との交流」によると、米国ピーボディ・エセックス博物館にはモースが残した文書が四万六千点以上収蔵されており、そのうち書簡だけでも一万二千通以上、さらに確認できる日本人がモースへ送った書簡が二六七通ほど残されています。木村氏は美術商の松本文恭の回顧録から次の一文を引用して、モースが日本人学生と交流していた様子を紹介しています。「ハーバード大学、マサチューセッツ工科大学、ボストン大学、ブラウン大学などに入学した連中（日本からの留学生）はみなモース博士を一回か二回は訪ねるが、変人だから近寄らない方がよいといって敬遠した」と紹介しています。が、木村氏によると「留学中にモースに会い、彼のホスピタリティに感激してそのお礼を伝える書簡が数々残されている。たとえば米国で活躍した歴史学者でイェール大学教授の朝河貫一（1853～1928）や外交官の小村寿太郎である」と書かれています。

残念ながら小村がモースに宛てた手紙の内容は記されていませんが、モースのホスピタリティ（心からのおもてなし）に感謝した内容でした。小村たち留学生は機会をとらえて米国の知識人たちを訪ねて見識を広めていたようで、その中で特に親しく交流を持った一人が電話を発明したベルでした。（ベルと小村との交流につきましても『小村寿太郎 若き日の肖像』を参照下さい）

モースと小村の詳細な交友はこれ以上の情報はありませんが、モースはハーバードで小村のルームメイトであつた金子堅太郎とともに、日本美術を世界に紹介したフェノロサにも影響を与えています。

フェノロサ（1863～1908。小村より二歳年長）と小村との間に直接の接点はなかったようですが、ハーバード大学で哲学、政治経済を学び金子堅太郎とは同窓生でした。卒業後、ボストン美術館付属の絵画学校に入っていました。が、先に来日していたモースの推薦により、東京大学の法理文学部教授として明治十一年（一八七八）に来日しました。来日後すぐに金子の影響で日本美術に関心を持つようになりました。当時、西欧化が進む中で見捨てられていた日本文化を高く評価し、弟子の岡倉天心と東京美術学校の設立に尽力して、国内外に日本文化を紹介しました。

次にバーシバル・ローエル（1851～1916。小村と同じ年の生まれ）を紹介いたします。ローエルは米国ボストンの資産家に生まれ、ハーバード大学を小村より一年早い一八七六年に卒業しています。実業家として活躍する一方で天文学者としても火星の運河説や火星人の存在説を主張、その他に冥王星の存在を予言したことも有名です。またアジア研究家としても知られ、日本などアジアを探訪しています。

ローエル自身はモースの日本についての講演を聞いたことが契機となり来日。一八九一年には「能登、人に知られぬ日本の辺境」を出版して小泉八雲らに強い感銘をあたえています。また

従弟のビゲローはフェノロサとともに岡倉天心を支援しています。

ローエルは一八八二年、一八八九年、一八九一年、一八九二年の四回来日し、合計の滞在は約三年におよびました。実は四回目の来日の際、ローエルが東京に居を構えた邸について、小泉八雲の子孫である小泉凡氏が「島根女子短大紀要（二〇〇〇年）」に掲載された「バージヴァル・ローエルの新書簡に関する考察」の中で、次のように報告されています。その資料は池田記念美術館所蔵資料にあるローエルが小泉八雲に宛てた三通の書簡に関するもので、その中の明治二十六年（一八九三）六月二日と七月七日の書簡が東京赤坂一ツ木町八十番地よりローエルが発送したもので、この番地は、小村家の旧主（旧飢肥藩主家）である伊東祐婦子爵の邸でした。しかし、どのような経緯でローエルが伊東家邸の一角を借りたのかは不明でした。



小村寿太郎に関する研究発表会場の様子

この頃、ある新聞社から国際交流センター小村記念館（現、小村寿太郎記念館）へローエルが伊東祐婦邸を借家した経緯について問い合わせがありましたが、当時この質問に回答できる資料が確認されていなかったため、資料なしと返事するに止まりました。その後、私が小村記念館の学芸面を担当することになり、飢肥城歴史資料館に收藏されている明治初期から昭和二十年代の伊東家飢肥邸（豫章館）に送られた手紙を整理する過程で、次に紹介するローエルに関わる手紙を二通発見いたしました。これにより借用の申込を受けて入居した際の経緯が初めて分かりました。

・明治二六年一月八日付書簡、封筒の表「宮崎県日向国南那珂郡飢肥村／山之城軌様」、封筒の裏「東京／大内定也／一月八日」。本文「拝啓、先便ニテ取落候間、落手被下度候、御殿モ今度借手アリ、米国ボストン人ローエル氏ナリ、家賃ハ一ヶ月三十五円、六ヶ月ノ約束、酒井様ヘモ御相談ノ上取極メタリ、委細ハ後便ヨリ可申述候。／定也／山之城様」

・明治二六年一月八日付書簡、封筒の表「宮崎県日向国南那珂郡／飢肥村伊東子爵邸内／山之城軌殿」、封筒の裏「東京市赤坂区一ツ木町八十番地／一月十日、大内定也」。本文「先日鳥渡申上置候通、御邸ハ愈米国人ローエル氏へ貸渡、家賃ハ一ヶ月金三拾五円、本日ヨリ引移り候、庭ナドノ手入ハ、従前ハ一層十分に行届き可申（植木屋一人カゝヘアリ）、家モ決シテ粗末にいたし候様の事モ無之に付、西洋人に貸シタルトテ、御不審に御思ヒ被下間

敷候、（以下は別件につき省略）」（日南市所蔵）

⑥、大内定也と山之城軌は飢肥藩の旧臣、当時伊東家の家扶。酒井様は伊東祐婦の妻の兄、酒井忠道、旧小浜藩主。

ローエルが横浜港に着いたのは明治二十五年（一八九二）十二月二十五日。それから三週間あまりで赤坂伊東家邸の一角を借り受けたことが、この書簡で判明したわけですが、依然として誰が短期間（二週間）の内にローエルと伊東邸を結びつけたのかは不明です。政府、とりわけ外交関係者ではないかと推測されますが謎です。

私は平成二十七年（二〇一五）に、この書簡の発見を日本ローエル協会の会員大西直樹（当時基督大学教授、アメリカ文化学者）氏に報告するとともに、この疑問について、状況証拠ではありませんが「仲介に関わったのは小村寿太郎ではないか」と私見をお伝えしました。

私がそのように推測した理由は、外務省関係者で伊東家と強いつながりがある人物であること、さらに手紙の一月八日の四日前に当る一月四日に、小村寿太郎が年賀で赤坂伊東邸を訪れていることから可能性が高い人物と推測しました。それから十年、いまだそれを裏付ける資料は発見されていませんが、小村の立場や、今回紹介した親日家外国人との交流関係から推測すると、やはり小村が何らかの形で仲介していた可能性はあるものと考えます。今後、なお検証できる資料の発見、研究に期待したいと考えます。

最後にローエルと交流があった小泉

八雲（「ラフタリオ・ハーン」「ヘルン」。1850～1904。小村より五歳年長）について。

八雲は一八九〇年来日、翌年日本人と結婚して、一八九六年に帰化しています。八雲と言えは怪談についての著作で有名ですが、日本文化をこよなく愛し紹介した著作も多数発表しています。国内外で高く評価されています。小村寿太郎もその著作を愛読したひとりでした。

八雲が訪日した契機は一八八四年（明治十七年）十二月からアメリカ南西部ニューオーリンズで開催された、綿業百年を記念する万国博覧会でした。日本も博覧会に参加し農商務省職員の高峰譲吉や服部一三らを派遣しました。当時、米国の文学サロンで活躍していた八雲は日本館に足しげく通い、高峰らと交流するうちに日本に対する強い興味を抱くようになりました。六年後に来日、日本を紹介する著述を始めます。

小村と八雲の間に直接の交流はありませんが、小村と同郷の榎本卯平の著書『自然の人小村寿太郎』によると、小村は八雲の著作を次の様に評していました。

「先生（小村）は評判の高い芝居が来れば一度ずつは必ず行かれた。好きで行かれたのか、必要で行かれたのか、それは私には明かに言えぬ。しかし想像して言えば、必要の方が重きをなしていたらしかった。時々筋書の本などが書齋の机にある事もあった。私のこの想像を事実に近い力となるのは、ヘルン（小泉八雲）の著書である。

ヘルンの名は当時米国では読書社会は無論のこと、交際社会の話題であった。私はヘルン先生の居られた東京の大学に居たというだけで、或人から大に歓迎されたことさえあった。小村先生は、その頃まで、よくヘルンを知られなかった。急に先生の書齋に『ころろ』（一八九六年発行）だの、アウトオブ・ゼイリスト（『東の国より』一八九五年発行）だの、グリーニオングス・インブダフィールズ（『知られぬ日本の面影』一八九四年発行）だのと言うヘルンの新著述が顔を揃へ始めた。そうして先生は「ヘルンを知らねば、日本人としては米国の交際社会に恥をかく」と、言っておられた。実際そうであつたのである。その必要から先生は急にヘルンを読み出された。流行の芝居もそれと同じであつたであらうと推測するのである」

意外にも小村は文芸面にも関心があり素養もあつたようで、多くの逸話があります。少々話しがそれますが、例えば芝居について、アメリカ公使の時に、後にオツペケ節で一世を風靡した川上音二郎が一座を率いて海外巡業のため渡米して評判を博していました。ボストンに向いて川上の公演を見た小村は、感動して彼らをワシントンの日本公使館の夜会に招き公演を行わせました。公使館員たちも熱心で館内に舞台を設え、日本の綴帳まで新調して川上ら感激させました。当日の夜会（明治三十二年二月七日）には米国外務省など知名の紳士淑女が招待され、公使館設立以来の盛会となり、川上一座の評判も更に高まりました。夜会後、小村は川上と種々談話を交

わしました、最後に「川上君、西洋人の眼には、あんな六法（六方。歌舞伎の演技、演出用語）なんか踏んで見せたって解りませんよ。それよりか、君が独特のオツペケペをやって聞かせたまへ。西洋人にはその方が早解りします」と、まじめに注意したそうです。駄目だしを与えるほどの力の入れようでした。しかし外相として外交の一線で活躍するようになると私的な嗜好を顧みることなく、仕事に没頭したように思えます。

日本研究家として米国で知られるようになった八雲ですが、日露戦争が勃発した明治三十七年（一九〇四）の九月に五十四歳で亡くなりました。小泉凡氏の『来日外国人のみた日露戦争』によると、翌年小村は八雲の長男小泉一雄に依頼して八雲の著書『日本一つの試論』と『知られざる日本の面影』を送ってもらい、五月十八日付けで礼状を送っています。

日本海軍がロシアのバルチック艦隊に日本海海戦で完勝するのは五月二十八日のこと、小村が小泉家から著書を送ってもらったのは、海戦を前に日本中が緊張のピークに達していたころでしょう。海戦の結果次第では終戦を目指した外交が重要な局面となります。小村は有利な条件での終戦、戦後日本の発展に目途をつける役目を担っていました。来るべき大仕事を前にして、日本の姿を紹介した八雲の著書を通して日本文化、伝統のすばらしさを再認識したかったのでしょうか。小村は、真の日本の姿を外国に紹介する親日外国人たちに、深い敬意の念を抱き、心の支えとしていたのでしょうか。

文中に紹介した資料の他、次の資料を参考にいたしました。

『川上音二郎貞奴漫遊記』『川上音二郎欧米漫遊記』金尾種次郎著

『明治の群像・断片「その1」』ヘルン、高峰そして漱石」石田三雄著

令和七年度

秋季県北大大会のお知らせ

令和七年度の秋季大会は、県北地区の担当です。詳細は後日お知らせします。

事務局からのお知らせ

会誌紹介

（令和六年宮史連加盟団体刊行分）

◇縣（あがた）

延岡史談会
第三四号
令和七年五月

◇史友會報

高鍋史友会
第六〇号
令和七年六月刊行

◇えびの

えびの市史談会
第五九号
令和七年六月刊行

◇ひなもり

小林史談会
第六五号
令和七年五月刊行

◇もろかた

都城史談会
第五九号
令和七年十二月刊行

◇南九州文化

南九州文化研究会
第一四一号
令和七年五月刊行

◇くしま史談会報

串間史談会
第一四二号
令和七年十二月刊行

第三七号
令和七年二月刊行
◇宮崎県総合博物館研究紀要

宮崎県総合博物館
第四五輯
令和七年三月

◇宮崎県総合博物館年報

宮崎県総合博物館
No五四
令和七年四月

◇宮崎県立西都原考古博物館研究紀要

第二一号
令和七年三月

県立図書館よりのご案内

【展示会】

○特別展「平部嶠南と日向地誌」

九月二十日（土）～十月十九日（日）

○特別展「若山牧水」生誕一四〇年記念
十一月八日（土）～十二月七日（日）

○共催展

遺跡発掘成果展「東九州自動車道
一一八遺跡 新富・高鍋編」

二月十八日（水）～三月八日（日）
「特別講座」

三月一日（日）

共催 宮崎県埋蔵文化財センター

※会場はいつでも県立図書館二階特別展示室、観覧無料、開室時間は、午前九時から午後五時までです。（月曜休館日）

【文化講座】

第一回「平部嶠南が遺した歴史資料」

講師…長友 禎治 氏（日南市役所
生涯学習課文化財係文化財専
門担当官）

九月二十日（土）

午後一時半～三時半

第二回「宮崎の野生動物―ヒトと動物の関係から考える―」

講師…岩切康二氏（宮崎野生動物
研究会会員）

十月二十五日（土）

午後一時半～三時半
第三回「シン・若山牧水」―牧水の新
たな魅力―

講師…伊藤一彦氏（歌人・牧水研
究家、宮崎県立図書館名誉館
長）

九月二十日（土）

午後一時半～三時半

※会場は、いつでも県立図書館二階研修ホール

講座の申込みは不要で、先着一〇〇名。
受講料は無料。

【古文書講座】

「古文書と親しむ」

第一回～第四回

六月七日（土）、七月

五日（土）、八月二日（土）、九月六日（土）
のいずれも第一土曜日に開催します。

講師は各回とも若山 浩章 氏（宮崎
県地域史研究会会長）で、佐土原藩
嶋津家日記等の古文書を読み解きま
す。

※会場は、県立図書館二階研修ホール。
時間は、午後一時半から午後三時半
まで。受講者数は先着三十名まで。
いずれも受講料は無料。

詳細は、県立図書館郷土情報担当
（〇九八五―二九―二九五四）までお
問い合わせください。

